令和2年度 かいじあむ古文書講座　第1回

おうちで古文書講座
「はじめて読む古文書」

令和2年4月25日
山梨県立博物館　　学芸員　海老沼真治

はじめに

みなさんこんにちは。学芸員の海老沼です。

（こんな顔をした学芸員です↓）

新型コロナウイルスの影響で、博物館は臨時休館となり、展示はもちろんのこと、講座などのイベントも開催できない状態が続いています。

とくに古文書講座は、毎回多くの皆様にご参加いただいていましたので、休館のために古文書に接する機会がなくなってしまうことは、大変心苦しく感じております。

そこで、こんな時でも、いやこんな時だからこそ、皆さんが古文書を学ぶことを少しでもお手伝いしたいと思い、本来古文書講座を実施する日に合わせて、ご自宅で古文書を学ぶことができる資料を作ってみました。

よろしければ、「おうちで古文書講座」に挑戦してみてください。

※途中、筆記をしていただくところがありますので、筆記具と紙・ノート類をご用意ください。

1．古文書に「親しむ」ための一例

初めて古文書を読もうという方は、まずどうやって勉強すれば良いか、ということが高いハードルになるかもしれません。

古文書は「**ミミズが這ったような字**」と言われるように、現在一般的に用いる文字と同じとは思えないほどに崩された文字で書かれている場合が多く、専門的な学習をしなければ読むことができないからです。

現在では初心者向けの古文書解読の入門書も数多く出版されています。ただし、これを勉強すれば誰でも必ず古文書が読める！という勉強方法が存在するわけではありません。

まずは皆さんに適した学習方法を見つけていただくことになりますが、参考として私が学生時代に勉強していたことをいくつかあげてみましょう。

【①（まず）〝活字〟を読んでみる】

いきなり実際の古文書を読む前に、古文書に書いてあることを現代の活字にしたもの（翻刻文）を読んでみます。

これは、まず古文書の正しい読み方（当時の言葉使いや言い回し、文書の書き方）を身につけることを目的としています。

そうすれば、実際の古文書で文字の形がわからないものがあったとしても、書式や前後の文脈から内容を想定することができるようになります。

武田氏関係であれば、『山梨県史』資料編、『戦国遺文武田氏編』に、古文書の翻刻文が多数収録されています。

自治体史によっては、一部に翻刻だけでなく「読み下し文」も付けてあるものがあります（県内では『甲府市史』『富士吉田市史』の古代中世資料編など）。

また、岩波書店『日本史史料』、吉川弘文館『史料による日本の歩み』なども、古文書の翻刻文に加え、読み下し文や解説が付いているものもあり（全てではない）、読み方を学ぶのに便利です。

まずは、皆さんの興味のある時代や地域の古文書について、活字化された史料集を読んでみることをオススメします。

最近では、インターネット上で古文書の学習ができるサイトも公開されています。中世の古文書ですと、「日本の中世文書Web」（https://chuseimonjo.net）は、文書の読み方を音声で示してくれるなど、とても親切です。

この時、わからない言葉があれば、面倒でも国語辞典などで意味を調べてみましょう。古文書に出てくる言葉は、例えば「自然」など、字は同じでも現代とは異なる意味で使用される言葉もあります。

※古文書に出てくる言葉を調べるには、古語を豊富に収録した辞典を使用します。1冊ものとしては『広辞苑』（岩波書店）となりますが、図書館が再開したら、ぜひ１度は**『日本国語大辞典』（新版全13冊、小学館）**を使ってみてください。

古文書の訓読には、多少の漢文・古文の知識が必要となります。漢文なら、多くの場合は、レ点、一二点、上下点くらいがわかっていれば問題ありません。

【②〝活字〟と古文書を見比べてみる】

次に、古文書の写真と活字になった翻刻文を見比べて、文字がどのように崩されているかを確認してみましょう。

この時、「くずし字辞典」などを使って確認してみるのもよいでしょう。

※「くずし字辞典」の多くは、少なくともへんやつくりなど、ある程度字がわかっていないと使うことができません。ですので、最初は写真と活字で「答えがわかる」文字を調べてみましょう。

古文書と活字、解説がセットで読める入門的な図書を読んでみるのも良いでしょう。

武田氏とほぼ同時代のもので、価格も手頃で入手しやすいものとしては、

・小和田哲男『戦国武将の手紙を読む』（中公新書、2010年11月）

・丸島和洋『真田信繁の書状を読む』（星海社新書、2016年9月）

などがあります。

また『山梨県史』資料編4、5は、別冊で一部の古文書の写真が掲載されていますので、翻刻文と見比べて読むことができます。

【③〝かな〟文字をおぼえる】

「かな」の崩し字をおぼえることも重要です。「かな」は漢字が崩れてできた字ですので、例えば「あ」なら、元となった「安」という漢字の崩し方をおぼえることにもつながります。

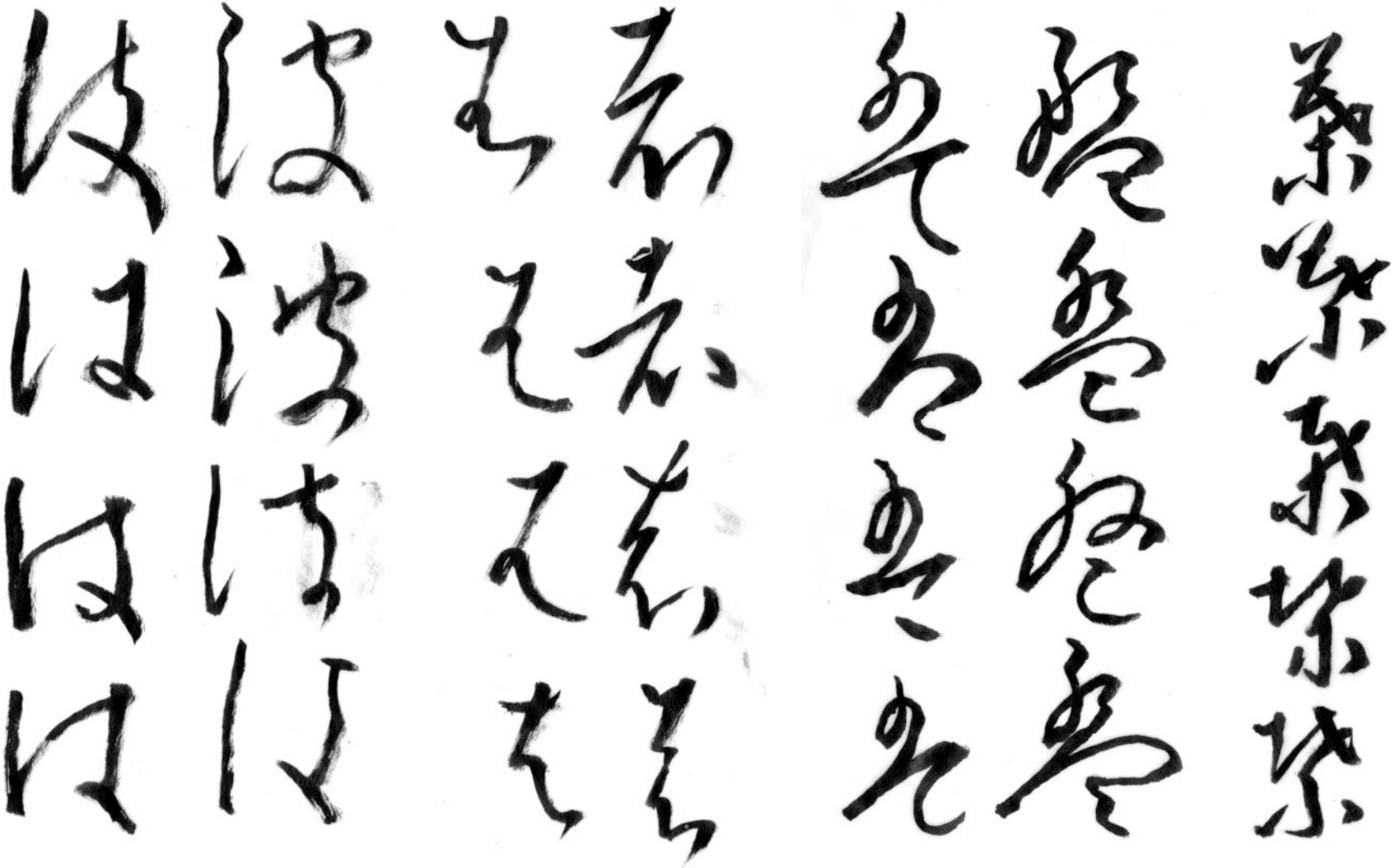
また、当時は「かな」に1つの漢字だけでなく、複数の漢字が使われていました。

「は」であれば、現在は「波」をもとにした字だけですが、「者」「盤」「葉」などの字も用いられました（次のページに例をあげています）。

つまり、ひとつの「かな」を学ぶことで、複数の漢字の崩し方をおぼえることができるのです。

かな「は」の字例

「波」　「者」　「盤」　「葉」



2. 古文書（活字）を読んでみましょう

以上、3通りの学習方法を紹介しましたが、どれをやるか、どの順でやるかは、皆さんのやりやすいものを選んで取り組んでみてください。
ではいよいよ、実際に古文書を読んでみます。今回は武田氏に関する古文書です。

【課題1】

まずは勉強方法①に示したように、次ページの活字の翻刻文を読んで、読み下し文を書いてみましょう。

※あえて、難しい言葉が含まれた古文書をあげています。読み方がわからないところは、無理せず先を読んでください。

読み終わった方は、その次のページに読み下しの例がありますので、答え合せをしてみてください。

【武田信玄書状】

依戦功敵数多討捕、頸之注文
給候、寔心地好候、此則者後詰之
一戦勝利無疑候、仍信玄則雖
可出馬候、有近所氏康父子、出陣
為催促、于今存之外延引、但今
晩当国若神子迄出馬候、五
三日之内以面可謝今度之戦忠候、
恐々謹言、
追而依眼（以下抹消）
三月十四日　信玄（龍朱印）
（宛所を欠く）

※読み下し例は次ページにあります。

【読み下し文（例）】

戦功により敵数多討ち捕り、頸の注文給わり候。寔に心地よく候。このときんば、後詰めの一戦勝利疑いなく候。よって信玄すなわち出馬すべく候といえども、近所に氏康父子有りて、出陣を催促せんがため、今に存の外に延引す。ただし今晩当国若神子まで出馬し候。五三日の内に面をもって今度の戦忠を謝すべく候。恐々謹言

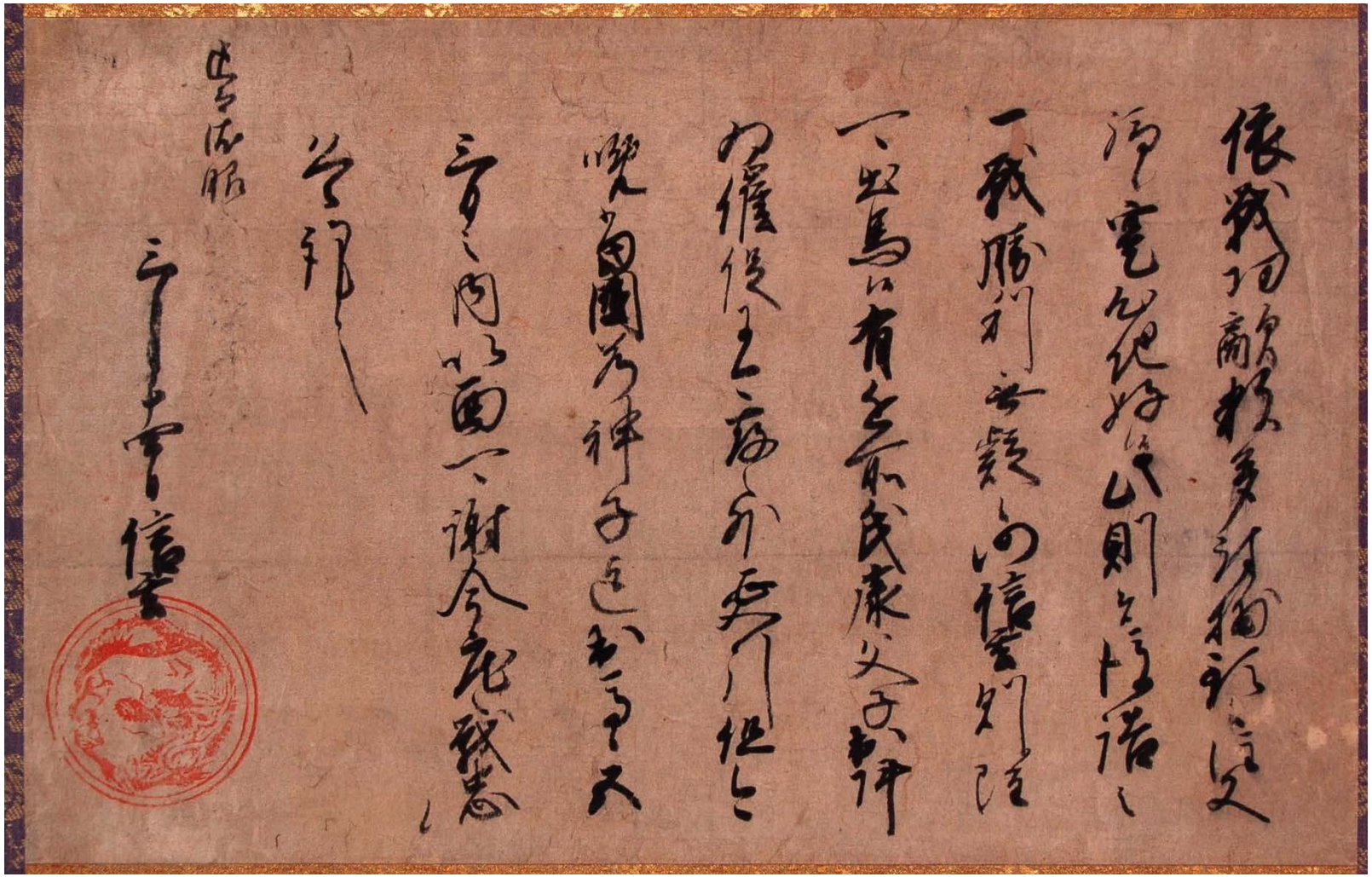
追って眼…により…

三月十四日　信玄（龍朱印）

いかがでしたでしょうか？

初めのうちは、半分くらい読めていれば十分だと思います。

下の写真は、実際の古文書の原本です。（個人蔵・寄託資料）



見慣れない言葉、難しい言葉がいくつかありましたので、説明いたします。

・「寔」は「まことに」と読みます。現在ではほとんど使うことはありませんが、古文書の用例辞典にも載っている字です。

・「此則者」、この古文書で最も難しい言葉です。「このときんば」と読み、「この時には」のような意味で使います。「則」だけでも「ときんば」と読みます。初めての方は読めなくて当然のウルトラC難度の言葉ですが、国語辞典にはちゃんと載っています。

・「五三日」は「ごさんにち」と読みます。「ごじゅうさんにち」ではありません。「数日」という意味になります。これも、国語辞典に載っている言葉です。

※これに関連して、古文書では「一七日」といった表記もありますが、これも「じゅうしちにち」ではなく、「いちしちにち」と読みます。前近代の古文書では「じゅうしちにち」のことを「一七日」と書くことは、基本的にはありません。

それ以外の言葉は、概ね現在と同じ感覚で解釈して差し支えありませんが、わからないものがあれば、煩をいとわず辞典等で調べながら読んでいくと良いでしょう。

これらをふまえて、読み下した古文書の現代語訳を次ページに示します。

【現代語訳（例）】

（あなたの）戦働きによって敵を大勢討ち取り、討ち取った敵兵のリストを頂戴しました。大変喜ばしいことです。このうえは、後詰めの軍による一戦も、（武田方の）勝利は間違いないでしょう。したがって信玄自身もすぐに出馬するべきところでありますが、近所に北条氏康父子が兵を出してきたため、（防戦のため家臣たちに）出陣を命じているうちに、思いのほか（信玄の出陣が）遅くなってしまいました。ただし、今晩は甲斐国の若神子（北杜市）まで出馬いたしました。数日の内にはそちらへ到着し、直接対面して、今回の（あなたの）手柄にお礼したいと思います。

追伸、眼（の病気で花押が書けないので、印判を使います。）

三月十四日　信玄（龍朱印）

この現代語訳例は、あくまでも私の解釈による一例です。

この古文書には年号が書かれておらず、また宛先が失われていたり、文字が一部抹消されていたりと、大事な部分が色々わからなくなっています。

そのため、本文の一部については、実は別の解釈ができるところもあります。まだ「正解」が出ていない、といっても良いでしょう。

今回はあまり詳しくお話しできませんが、古文書を読み、正確に解釈することは、かなり大変なことだということ、このような地道な作業を1つひとつ行っていくことが重要だということを、ご理解いただければと思います。

３．古文書（原本）を読んでみましょう

次は、いよいよ古文書原本の写真を見て、どんな文字が書いてあるかを判読してみましょう。

ただし、古文書の文字の崩し方も様々ですので、初めのうちは読みやすいもの（一見してわかりそうな文字がいくつかあるもの）を選んで読み進めていくと良いでしょう。

無理は禁物じゃ。読めるものから少しずつ学ぶがよい。

【課題2-1】

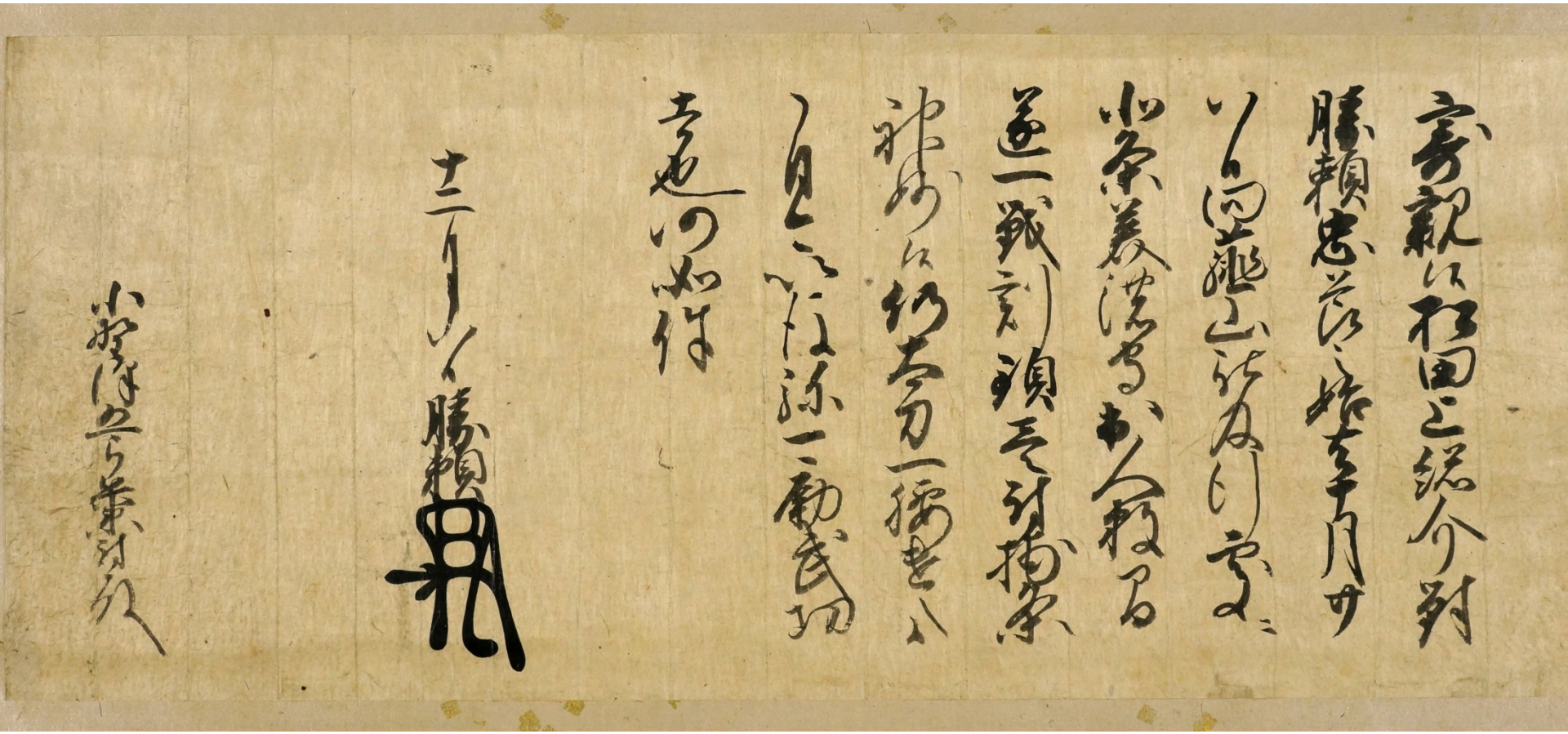
次ページにある古文書の写真を読み、まずはどんな文字が書いてあるか、翻刻文を作ってみましょう。

※わからない文字はあまり長考せず、まずは読める文字を埋めていきましょう。そうすると、前後の文脈でわからない文字が想定できることもあります。

※読点「、」は付けなくても構いません。

読み終わった方は、その次のページに翻刻文の例がありますので、答え合せをしてみてください。

☆翻刻文を作ってみましょう☆



【武田勝頼感状　当館蔵】

※翻刻文の例は次ページにあります。

【翻刻文】

寄親候松田上総介、対
勝頼忠節之始、去十月廿
八日向韮山被及行処二、
北条美濃守出人数間
遂一戦刻、頸壱討捕条、
神妙候、仍太刀一腰遣之候、
自今以後弥可励武功
者也、仍如件

十二月八日　勝頼（花押）

小野澤五郎兵衛尉殿

初めて古文書を読む人にとっては、読めない文字が多くて大変だったかもしれません。

しかし、1行目の中ほどは「●田上●介」くらい読めると、「人の名前かな？」と推測できます。

「●●介」とあるのを見て、例えば「吉良上野介」といったように、官職（受領）名ではないか？ということまで推測できれば、あとは文字が読めなくても、一文字目に「上」がつく国の名前を探して、文字の形が近いものを当てはめて正解を出す（用例辞典を調べる）ことができます。

時間はかかりますが、こんな形で文字を推測して調べられる場合もあります（私たちもよくやっています）。

では、本日最後の課題です。

【課題2-2】

課題2-1で作成した翻刻文を読んで、【課題１】と同じように読み下し文を書いてみましょう。

読み終わった方は、次のページに読み下しの例がありますので、答え合せをしてみてください。

【読み下し文（例）】

寄親に候松田上総介、勝頼に対し忠節の始めに、去る十月二十八日、韮山に向かい行に及ばるる処に、北条美濃守人数を出す間、一戦を遂ぐるの刻に、頸一討ち捕るの条、神妙に候。よって太刀一腰これを遣し候、自今以後いよいよ武功を励ますべきものなり。よって件のごとし。

十二月八日　勝頼（花押）

小野澤五郎兵衛尉殿

読み方が現代と違うものがありましたので、簡単にご説明します。

・3行目の**「行」**は、この1字で「てだて」と読みます。意味は現在の「手立て」に近く、「策略・作戦」等となりますが、「行に及ぶ」となると、「その作戦を実行に移す＝兵を動かす」というニュアンスになります。

※『日本国語大辞典』の「てだて（手立）」の項目では、古辞書などに記されている「行＝てだて」の用例を引用しています。

・4行目の**「人数」**は、「にんずう」ではなく「にんじゅ」と読み、「軍勢」を意味する言葉です。

※『日本国語大辞典』の「にんじゅ / にんず」の項目では、軍勢という意味を載せていませんが、戦国時代にイエズス会宣教師が作った「日葡辞書」には、**「Ninju（ニンジュ） 人かず、人びとの数、または、大勢の人々・軍勢 」**とあり（『邦訳日葡辞書』岩波書店）、戦国時代には「人数」が「軍勢」の意味でも用いられていたことがわかります。

これらをふまえて現代語訳すると、以下のようになります。

【現代語訳（例）】

（あなたの）寄親である松田上野介（戸倉城将笠原政晴）が、（前の主君である北条氏から）勝頼に寝返り、その忠誠を示す手始めとして、伊豆韮山城（静岡県伊豆の国市）へ向って兵を動かしところ、（韮山城将の）北条美濃守（氏規）が軍勢を出してきたので、一戦に及び、敵兵の頸一つを討ち取ったことは見事です。よって太刀一腰を贈ります。今後もいっそう武功をあげるよう励んでください。

十二月八日　　勝頼（花押）

小野澤五郎兵衛尉殿

おわりに

本日の「おうちで古文書講座」は以上です。

私たちも、このような形の講座は初めてのことですので、わかりにくいところがあったかもしれませんが、少しずつ改善しながらご提供してまいりたいと思います。

5月の古文書講座も中止が決まっていますので、またこのような形での講座になります。

博物館が再開し、イベント等も通常どおり実施できるようになりましたら、ぜひ古文書講座にご参加ください。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました!!